

【妊婦に対する百日咳ワクチンについて】

■ 有用性

- ・妊婦が百日咳ワクチン(Tdap)を接種することで、胎盤を通して赤ちゃんに抗体を移行できる。
- ・生後すぐの赤ちゃんはワクチン接種ができないため、妊婦からの抗体移行が重要。
- ・海外データでは、赤ちゃんの百日咳発症を約 90%減少させる効果が報告されている。
- ・推奨接種時期は、妊娠 27~36 週(特に 30 週前後が望ましい)。

■ 安全性

- ・Tdap ワクチンは不活化ワクチンであり、生ワクチンではないため胎児への感染リスクは考えにくい。
- ・流産、早産、胎児異常、妊娠合併症との関連性は認められていない。(海外)
- ・一時的な副反応(接種部位の腫れや倦怠感)はあるが、重篤な副作用は非常にまれ。

■ 日本国内の状況(2025 年現在)

- ・日本では妊婦への百日咳ワクチン接種は公式には推奨されていない

い。

・当院で使用する DPT ワクチンは

トリビック®は DPT ワクチンで、日本国内で承認されている不活化ワクチンで
す。

本来は小児用に開発されたワクチンですが、現在では成人への使用も

認められており、特に妊婦への接種が注目されています。